

[011]九州大学産学連携センター年報 : 11

<https://doi.org/10.15017/15511>

出版情報 : 九州大学産学連携センター年報. 11, 2005-09-30. 九州大学産学連携センター
バージョン :
権利関係 :



4. デザイン総合部門事業

4.1 デザイン総合部門の目標

芸術工科大学として創立以来行なってきたミッションは、産学連携共同研究による知的生産推進、キャンパス・インキュベーション、知的財産管理（権利化・技術移転）の3つである。

このうちのキャンパス・インキュベーション、知的財産管理（権利化・技術移転）は、2大学統合後には別部門（VBL ベンチャービジネスラボラトリー及び知的財産本部）に移管され、産学連携共同研究による知的生産推進に、活動を重点化している。但し、いずれも知的生産推進に関わることであり、関連については弾力的に運用・活動することとしている。

そこで、全学共同利用教育研究施設としてのミッションは、デザインに比重の掛かった、産学連携共同研究による知的生産推進であり、またそれを推進するための教育研究環境の形成である。特に、九州大学の教育研究活動の特色形成としても、科学技術のみならず、デザインや芸術分野に拡張された、様々な知的生産活動を推進するものとする。以上をまとめて表現すると、デザイン総合部門の目標は、デザインコンシヤスな研究プロジェクトの推進であり、それをより促進する教育研究環境の形成である。

4.2 デザインコンシヤス研究プロジェクトの企画と推進・支援

デザイン分野に特化した、あるいはデザインに何らかの点に関わる、デザインコンシヤスな共同研究・知的生産の企画と推進支援が、デザイン総合部門活動の中心軸となる。

これをより具体化するために、2大学統合の基本方針に従い、ある部分は芸術工科大学・地域共同研究センターを引き継いで、デザインに関わる芸術工学研究院に一方の軸足を置きつつ、一方では広く九州大学全体の共同研究・知的生産の企画と推進支援に当たることになる。すなわち、デザイン分野の振興という軸と、研究プロジェクトの中でのデザインに関する意識や内容を高めるという、2つの基本軸により張られたフィールドで活動する。

その具体的なフィールドは、いわゆる直接的にデザインを生み出すための研究活動のみならず、様々な分野に関係する可能性がある。例えば「人間の心理生理等、感性に関わる測定・評価分野の研究」、「工業製品の開発における科学原理や技術配置の工夫により、製品の評価を高める（デザイン性を上げる）研究」、「音楽・映像・演劇など、人間が感じることによって成立する製品・商品・コンテンツ開発に関する研究」、「人間の心理生理等の反応をコントロールすることで、健康状態をより良好にする研究」、「人間の心理生理等の感性に関わる評価を踏まえて、新しい製品開発を導く研究」などなど、非常に広範な関係分野を持っている。

また近年の技術発展を踏まえて登場した新しい分野として、人体と人間心理生理の両面において、人間を精密に記述・描写する（モデリング）研究も進んでいる。例えば人体の精密なモデリングを行うことで、医学的（解剖学的）研究や、衣服による体温調節の研究、空気調和システムの効果測定評価など、様々な分野研究の基礎的な知

的支援を行い得る。

従来の技術では、人体・1体をモデリングするに多額の費用を要したが、そのコストは次第に低下しつつあり、それだけ応用できる範囲も広がっている。また測定し記述できる項目も拡大しつつあり、形状や色などだけでなく、組織内部の状態や問題点なども知ることが出来るようになってきている。

九州大学では、以上に関連した研究機構や研究拠点組織として、例えば「ユーザーサイエンス」研究機構や、「感覚特性に基づく人工環境デザイン」研究拠点があり、今後ますます学内でのネットワークを拡張し、既存の学問分野とのリンクを強め、結果として研究及び教育の分野展開を図ることになる。

4.3 知的生産と知的財産権管理

産学連携センター・デザイン総合部門として、産学連携共同研究を推進し、知の生産を促進することで、成果としての知的生産物の財産化を準備し、知的財産本部による管理・移転にスムーズに移行出来るようにする。

基本的には、相当数の知的生産物の存在があって始めて、特許等の知的財産権が一定数確保できる訳であり、また一定数の知的財産権を継続的に生み出して行くことは、知の生産拠点としての大学の、欠くべからざる役割であると言える。

知の生産サイクルの下流にある、知的財産管理（権利化・技術移転）は、知的財産本部・デザイン総合部門が行なうものとする。知的財産本部は、九州大学 TL0 とともに連携し、大学が継続的に生産する知の成果物の社会還元としても、積極的に技術移転を進めて行く。また一方、このようにして知の成果物を生かして行くことで、生産の成果が様々な形で知の生産サイクルの上流にも戻されることになり、大学における知の生産をさらに励起することにもなる。生産-活用-再生産のサイクルを強化するためにも、各部分での活動を強化して行く。